

2月に入ると寒さも和らぎ、ずいぶん春めいたように感じます。暦の上とはいえ、節分、立春を迎えると、いよいよ春だと気分も弾むものです。今年の節分は2月2日でしたが、例年の3日より早く迎えるのは124年ぶり、1897年（明治30年）以来とのことです。

春の訪れとともに、此所彼所に梅の花が咲き始めました。梅の花は、市内の多くの学校の校章にも使われていますが、厳しい寒さに耐え、芳しく可憐に開く花には心惹かれます。また、「2つのものが調和している」「よく似合っている」様子を表すことわざに「梅に鶯」がありますが、梅も鶯も春の訪れを告げてくれます。実際は梅に来るのはメジロのようですが。

ところで、「全国各地の気象台ではこれまで植物34種目、動物23種目を対象に、開花や初鳴きなどを観測する生物季節観測を行っていたが、2021年1月からこれを大幅に削減し、植物6種目9現象を対象とした観測に変更する」と昨年末に報じられていました。

この「植物6種目9現象」とは、「あじさいの開花」、「いちじくの黄葉・落葉」、「うめの開花」、「かえでの紅葉・落葉」、「さくらの開花・満開」、「すすきの開花」が対象です。

「生物季節観測」は、季節の遅れや進み、気候の違い・変化を的確に捉えることを目的として、1953年（昭和28年）から全国で統一した観測方法で開始されたそうです。しかし、近年は都市化の進展など気象台・測候所周辺の生物の生態環境が変化してきており、「植物季節観測」では適切な場所に標本木を確保することが難しくなってきたこと、「動物季節観測」では対象を見つけることが困難となってきたことにより、6種目9現象以外のものは廃止に至ったと説明されていました。

説明によると、「生物季節観測」はあくまで季節の変化を知らせる「気象」観測の一環として行ってきたもので「生態」観測が目的ではなく、限られた人員で動植物を探ることが難しくなってきたことなどが廃止の理由だそうです。廃止対象を見るとこうした状況の変化に理解できる点もありますが、長年続けられてきただけに残念な気がします。

これによって「うぐいすの初鳴」、「つばめの初見」、「チューリップ開花」、「ひがなばな開花」などの観測は廃止になりました。「梅」は残りましたが「鶯」は消えた訳です。

何やら、季節感を身の回りの動植物の変化で細やかに表現してきた日本の文化が薄れていくような寂しさを覚えました。ちょうど昨年のメルマガ2月号「快晴終了」で、気象観測が目視から自動化されたことを掲載しましたが、これと重なる思いです。

「生物季節観測」の大幅削減のみを以って語る訳ではありませんが、今日の社会の進展において、自動化やデジタル化を追求することの価値は理解できますが、一方で「肌で感じる」ことの尊さが失われることがあってはならないと思います。特に、幼い頃に、直接体験し、実感することは人間としての成長において極めて貴重であると考えます。

「生物気象観測」の対象が削減されても、季節の移ろいを動植物に感じる感性をこれからも大切にしていきたいものだと思います。

「鶯の 覚束（おぼつか）なくも 初音哉」（正岡子規）これぞ春ですね…（N.W）